

⊠特集 ルネサンスにおけるテキスト・知識人・政治⊠

序

小澤 実

本特集は、ルネサンス期のヨーロッパにおける知識人と同時代の政治に関する、五人の論者による報告である。

報告一 ハラルド・ミュラー（纒田宗紀訳）「マリアかミネルヴァか ベネディクト派修道院におけるルネサンスの学識」[Harald Müller, Maria oder Minerva: Gedanken zur Renaissance-Gelehrsamkeit im Benediktinerkloster]

報告二 皆川卓「西暦一五〇〇年前後の西南ドイツにおける人文主義者、政治と地域的アイデンティティ」[Taku Minagawa, Humanists, Politics, and Regional Identity in South-West Germany around 1500 AD]

報告三 ゲオルク・シュトラック（渡邊裕一訳）「修道士ロベール、イタリアの人文主義者たち、クレルモン

の宗教会議（一〇九五年）」[Georg Strack, Monachus Robertus, die italienischen Humanisten und das Konzil von Clermont (1095)]

報告四 イェシカ・ノヴァク（阿部ひろみ訳）「ルネサンス期ロンバルディア地方の学識者―「学芸」と政治の間で：ローランド・タレンティのケース―」[Jessica Nowak, Lombardische Gelehrte in der Renaissance zwischen artes und Politik: Der Fall des Rolando Talenti]

報告五 村瀬天出夫（築田航訳）「錬金術と終末論…ドイツのパラケルスス主義者パウル・リンクと彼の救済史観」[Amadeo Murase, Alchemie und Eschatologie. Der deutsche Paracelsist Paul Linck und seine Heilsgeschichte]

序（小澤）

報告一のハラルド・ミュラー（アーヘン工科大学）は、アウグスブルク近郊のオットーボイレン修道院の修道士ニコラス・エレンボクに焦点を当て、一六世紀における修道士と修道院における人文主義知のあり方を位置付ける。報告二の皆川卓（山梨大学）は、神聖ローマ帝国の一部をなすシュヴァーベンにおける複数の地域史記述に注目し、それらを記述した人文主義者らの地域アイデンティティ創出戦略を描出する。報告三のゲオルク・シュトラック（マールブルク大学）は、教皇ウルバヌス二世による著名な十字軍演説を伝える唯一の史料である修道士ロベールの記述を検討し、フラヴィオ・ピオンドとベネデット・アッコルティという二人の人文主義者がその記述をいかに操作していたのかを提示する。報告四のイエシカ・ノヴァク（ヴッパータール大学）は、ロンバルディア出身の「無名の」人文主義者ローランド・タレンティの未刊行書簡から彼の人的ネットワークを再構成し、学識を政治ネットワークの中で地位確保のために用いる人文主義者という類型を示す。報告五の村瀬天出夫（聖学院大学）は、パラケルスス主義者のパウル・リンクを取り上げ、自然科学テクストとそこに内包される終末論的思想の創出が、いかに同時代の宗派化や政治化を反映しながら行われていたのかを検討する。

これら五本の報告からなる本特集の趣旨は、ルネサンス

期における知識人の知的テクストの解釈という営みに焦点をあてるとともに、その知的行為を、同時代の政治コンテクストの中で読み解くことに主眼を置いている。日本でも多くの研究者の関心を引く絢爛たるイタリア・ルネサンス知識人を念頭に置くならば、本特集で取り上げられる人文主義的教養を持つ知識人は、フラヴィオ・ピオンドなどを除けば無名の部類に入るかもしれない。しかしながら五本の報告を読み通すことによつて我々が理解しなければならぬのは、第一に、イタリアで生まれた人文主義思想がアルプスを越えた北ヨーロッパにも広く浸透していたこと、第二に、そうした人文主義思想を受容し彫琢していた「無名の」数多くの人文主義者が各地にいたこと、第三に、彼らのテクストは本人にその意図があるなしにかかわらず、同時代の小刻みな政治動態の中で生成され利用されていたことである。古代テクストの再発見やアジアと新大陸からの新情報の流入で共通知が再構築され、それらを書簡ネットワークを通じて共有され論争されるべき基盤情報となし、同時代の君主の動向と連動する形で宗派対立が先鋭化し、イエ意識やおらが村から国家水準に至るまでアイデンティティ意識の高まった一五世紀末から一七世紀初頭にかけてのヨーロッパ半島において、学知は武器となった。学知は直接的に「役に立つ」のである。

これら講演で用いられている思想へのアプローチ方法をインテレクチュアル・ヒストリーと呼んで良いかもしれない。それは、どちらかといえば後世の観点で意味があるとされたテキスト理解を進める従来の哲学史、精神史、概念史などに比べ、同時代の基準に沿った価値観を反映した思想やテキストの動態性やそれを条件づけるコンテキストをフィーチャーする。こうした思想史研究は、歴史学部の中に常勤講座を設け、そこにインテレクチュアル・ヒストリーの専門家として自らをプロモートする研究者をかかえている海外ではすでに一般的な共有財産となつていているように思われるが、日本でもさほど珍しいものではなくなくなつてある。例えば、ヒライ・小澤編『知のミクロコスモス：中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』（中央公論新社、二〇一四年）やヒロ・ヒライが監修する *bibliotheca hermetica* 叢書（勁草書房）などはその成果の一部であろうし、科研費基盤研究（B）「西欧ルネサンスの世界性と日本におけるキリシタンの世紀」（課題番号 25284032・代表：根占猷一）での幾つものシンポジウムは日欧の研究者の交流を格段に広げた。もちろん、インテレクチュアル・ヒストリーの対象となるのは、欧米や前近代に限定されるわけではなく、近世中国や近代日本でも適用可能なアプローチである（小澤編『近代日本の偽史言説』

歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』勉誠出版、二〇一七年）。いずれにせよ本特集も、そのような研究潮流の一つに位置付けられると言つても良いかもしれない。

本特集は、二〇一七年二月二〇日に、早稲田大学戸山キャンパス三三三号館において開催された国際シンポジウム「ルネサンス期のテキスト、知識人、政治」(Texte, Gelehrte und Politik im Zeitalter der Renaissance) の報告に基づく。シンポジウムは、日本学術振興会科研費基盤研究（A）「中近世キリスト教世界の多元性とグローバルヒストリーへの視角」（課題番号 25244035・代表：甚野尚志）が主催、科研費基盤研究（B）「中世盛期教皇庁の統治戦略とヨーロッパ像の転換」（課題番号 25284144・代表：池上俊一）が共催というかたちをとった。中世教皇庁に関するシンポジウムのためにドイツから来日していたハラルド・ミュラー、ゲオルク・シュトラック、イエシカ・ノヴァク三名の招聘研究者に加えて、それぞれの科研から皆川卓と村瀬天出夫のそれぞれを報告者として推薦した。最初の挨拶は主催を代表して甚野尚志（早稲田大学）が、終わりの挨拶は共催を代表して小澤が行った。

当日は、若手研究者の協力により報告原稿の翻訳も用意されていたこともあり、活発な討議が行われた。そうした

序（小澤）

討議や研究者間の交流は、合間合間にあるカフェブレイクやシンポ終了後のワインバーでの懇親会でも続いた。中世思想や教会史の専門家である主催者側代表の甚野は、かつてゲッティンゲンのマックス・プランク研究所に留学していたこともあり、報告者の紹介や当日の挨拶のみならず、会場準備から懇親会設定に至るまで大変な労を割っていた。充実した内容のシンポジウムを成功に導いた報告者と訳者に最大限の感謝をするとともに、大学時代の恩師の一人にこのような無理を聞いていただいたことに頭を垂れる次第である。

本特集は日本学術振興会科研費基盤研究（A）「前近代海域ヨーロッパ史の構築：河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成と展開」（課題番号19H00546・代表：小澤実）の成果の一部である。

（本学文学部教授）